

郷土あかし

郷土館だより
第25号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

五日市の社寺 その1

— 阿伎留神社についての— 考察 —

早稲田大学専門学校講師

白井 裕 康



▲阿伎留神社社殿 明治21年11月建築

1 はじめに

建築が生まれるためには様々な条件が必要ですが、その条件を大きくまとめるとつぎの3つが考えられます。すなわち理念—経済—技術です。建築を創造しようとする主体が何を目的としてどのような建築を構想するのか、あるいはどのくらいの経済力を建築に投入できるのか、それを実現するためにはどのような技術を駆使するのかといった条件で、生まれてくる建築の様相は大きく異なってきます。また理念—経済—技術の在り方は、社会と密接な関係をもっています。つまり、建築はそれぞれの歴史的段階において社会的意識が色濃く反映されたものであり、それゆえ社会の基本構造との繋りにおいて理解されなければならないといえます。

いま問題にしているのは五日市の社寺建築であり、それから何を学ぶかです。もちろん、五日市の社寺建築を

理解するためには様々な視点から考察を加えなければなりません。ここでは五日市の歴史の中で、古代・中世・近世・近代という各時代において実権的主体が誰であったのか、その主体が何のために社寺建築をつくったのかという視点から考えてみます。換言すれば、五日市という地域社会を動かした人々と社寺建築との関係を考察してみたいと思います。

2 神社信仰のはじまり

日本人の祖先が農耕を営むようになったときから、人々は自然との繋りを強く意識するようになりました。すな

わち、農業は肥沃な土地、豊かな水、穏やかな気候という恵まれた自然環境が前提であり、さらに土地を耕し、作物を栽培し、それを収穫する技術がともなってはじめて豊穰なる実りを手に入れることができます。しかしながら、大風・大雨に見舞われると、川は氾濫し、作物はなぎ倒され、逆に、雨が降らずかんばつになると作物は枯れてしまいます。このようにいったん自然が猛威をふるえば、作物は不作となり、生きていく糧を得ることが困難になるばかりか、自然の災害によって家が押し潰されたり、押し流されたりして、直接的に生命が危険にさらされることにもなります。それゆえ、人々は自然の恩恵に感謝すると同時に、自然の猛威に対して畏怖心を抱き、人間の力をはるかに越えた自然の力の前に従順であったといえます。

人々が、なぜ自然が猛威をふるうのかを考えたとき、自然の背後に神の存在を意識するようになりました。す

なわち、自然の猛威は神が怒ることによって引き起こされると考え、それゆえ自然への恐れはその背後にいる神への信仰へと転換されていったのです。神は自然界のあらゆる事物に生息していると考えられ、神の怒りを鎮めるため、神を招き、祭を行って、慰安するのです。ここに神に対する信仰の表現がはじまったのです。

3 神社の成立

それでは、自然神に対する信仰からどのようにして神社が発生してくるのでしょうか。

水田農業を営むためには、灌漑排水が不可欠ですが、これは集団による共同労働を必要としました。また生産性を高めることによって余剰な生産物を生みだし、富の蓄積がおこなわれ、その経済力を背景にして家族の結合→氏族の連合→部族の統合→国家の形成といった展開を可能にしました。それぞれの段階における共同体には、必ず共同体をまとめていく中心的存在、すなわち家長—族長—首長—天皇がいました。かれらは共同体を掌握することが最大の関心事であり、そのために神の力を借りなければなりません。すなわち、農業を円滑に運営するためには、自然—農業—人の関係をみれば明らかのように、神の加護がどうしても必要であり、そのために神を祭り、共同体を構成する人々の生命と生活の平穏を祈ったのです。その祭を主催し、神を祭るという神聖な行為を行うことができたのは共同体の長であり、そして祭事＝政事（まつりごと）を行うことによって長としての権威が成立し、その権威のもとに共同体のまとまりが形成されたのです。そして、ついには共同体を構成するすべての人々が神の意志にしたがうという構造が成立したのです。そのとき、神の代理として共同体の長は「氏の上」となり、共同体の人々は「氏人」と規定されたのです。そして氏の上は、その祖先を神と同格化して氏神とし、氏人は氏子となって、氏子が氏神を祭るという慣習が成立し、そこに神社が発生する基盤が形成されたといえます。

4 神殿の誕生

祭は、本来神に対して、種まきにあたって作物の豊稔を祈願し、収穫にあたって豊稔を感謝するために行われたのがはじまりです。それゆえ、自然界にいる神を祭る場に招き寄せ、共に歓楽することが目的であり、そのための施設を必要としました。すなわち、祭を行う広場に神地（磐境）を設け、神が依り付くための木とか岩など

（依代）^{よりしろ}が設けられたのです。さらには神が降臨し座するための施設（神籬）^{ひもろぎ}、また祭に用いられる道具（鏡・^{まがたま}勾玉・剣）を收藏する倉の施設もつくられたでしょう。そして、この神籬や倉の建築そのものが神を象徴するようになり、神社建築としての神殿へと発展していったと考えられます。

しかしながら、巨大神殿が成立するためには重大な契機が必要でありました。それは国家の成立と国家神の誕生です。神のための素朴な施設が神殿という建築に昇華するためには、神殿を理念として必要とする強大な力（国家）の存在があり、その中心的存在者の所有する経済—技術が神殿建築を生み出す段階にまで成熟していることが必要な条件です。それはいうまでもなく、大化の改新を契機とした天皇を中心とする中央集権国家の成立であり、それを理念的にあとづけた神話の創造と国家神を祭る伊勢神宮の神殿建築の誕生であるといえます。天皇が伊勢神宮の神殿を創造したことにより、神に対する信仰は、自然神を祭る原初的な段階から国家神を祭る抽象的な段階に移行しました。つまり政治上の実権者は、神を政治的権威の象徴として捉え、政治の一部として祭を行うようになったのです。そしてこの政治的な神は、実権者を加護するため近くに常在するようになり、神のすまいとしての神殿が実権者によって建築されたのです。

5 式内社阿伎留神社

五日市の古代を考えると、文献上の資料としてとりあげられるのは、式内社阿伎留神社に関するものが唯一のもので、これまでに神社の成立過程についてみてきましたが、古代における阿伎留神社の存在は、五日市に有力な勢力が存在したことの証拠であり、その勢力が阿伎留神社を創立した契機を考えてみます。

まず式内社とは、延喜5年（905）に醍醐天皇の命

神名帳 記載の多摩郡8座	
○阿伎留神社	(五日市町)
小野神社	
布多天神社	
○大麻止乃豆天神社	(青梅市御嶽山)
○阿豆佐味天神社	(瑞穂町殿ヶ谷)
穴沢天神社	
○虎柏神社	(青梅市根ヶ布)
○青渭神社	(青梅市沢井)
(○印 西多摩郡内所在)	

で編纂された『延喜式』の巻9である『神名帳』に記載されている神社であり、祭祀にあたって朝廷から奉幣があったいわゆる官社です。武蔵国には44座の式内社があり、武蔵国21郡119郷（『和名抄』による）のうち、多磨郡10郷中に8座の式内社があり、国府の置かれた郡として、武蔵国の中でその数は最大を誇っています。『神名帳』多磨郡8座のうち筆頭に名を連ねている阿伎留神社が、文献上最初に見出されるのは、『三代実録』の「元慶八年（884）七月十五日癸酉武蔵国正五位下勲六等畔切神に従四位下を授く」です。したがって9世紀後半には、阿伎留神社が秋川流域の小川郷（『和名抄』による郷名であり、のちの秋留郷）において有力な神社であったことは、否定できない事実です。

それでは、阿伎留神社は、いつ、だれによって創立されたのでしょうか。このことを考えるためには、五日市の古代を他地域、特に武蔵国府である府中との関係において、推測するより方法はないでしょう。

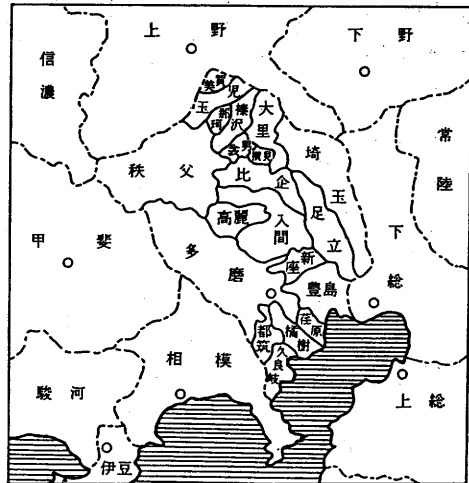
6 阿伎留神社の創建

阿伎留神社の創建は、社伝によると崇神天皇の時代であるとされています。また当社の社家阿留多伎家の家系によれば、当社の初代神主は、天穗日命あめのほひのみことの後裔なる武蔵国造土師連勇塩くにのみやっちはじのむらじおしおであるとされ、したがって仲哀天皇の時代に創建され、秋川流域で勢力を有した土師氏の一族または部民がその氏神を祭ったものと考えられています

（註1）。しかし、この地域に3世紀末から4世紀初に有力な勢力が存在したとは、にわかには信じられません。はたして阿伎留神社の創建はいつごろだったのでしょうか。

古墳時代の五日市には、後期末末期（8世紀末）の山田・館谷の積石塚古墳がある（註2）だけで、7世紀以前に大きな古墳があったことが確認されていませんから、4世紀ころに、大和朝廷と直接的に関係のある有力者が存在したと考えることは困難です。また五日市は、地形上水田耕作の適地に乏しい土地柄であり、わずかに阿伎留神社境内つづきの段丘斜面にある小庄部落に水田地帯がみられる程度です（註3）。このような辺境の地に、なぜ式内社多磨郡8座の筆頭に書かれるほどの神社が成立したのか、不可思議に思われます。

そこで武蔵国の式内社を分析しますと、多くの神社が多摩川中流域（南武蔵）、荒川中流域（北武蔵）、荒川・利根川上流域（秩父）に集中していることがわかります。これらの地域には古墳群が形成され、古墳からは鏡・勾



武蔵国20郡の区画（『大日本読史地図』による）

玉・剣などの副葬品が出土していることから、これらの古墳を築いた勢力は中央勢力（大和朝廷）との繋りをもっていたと考えられます。そしてそれらの勢力とは、それぞれ『国造本紀』にいう胸刺国造むさし、禰邪志国造むさし、知知夫国造ちちに想定されます。胸刺国造が多摩川流域を掌握していた段階（5世紀～7世紀中）においては、胸刺国造に繋りをもった勢力が存在し、秋川の水を利用して、水田耕作を営み、あるいは自然神を祭った原初的な信仰形態が成立していたかもしれません。しかしながら、その信仰形態が神殿（神社建築）を生み出すほど成熟した段階にあったとは到底考えられません。

そこで阿伎留神社が式内社に選定されるほどの有力な神社として成立した契機を考えてみますと、武蔵国の誕生が浮かび上がってきます。すなわち、大化2年（645）正月、改新みことりの詔が出され、それからまもなく、遅くとも天武13年（684）には武蔵国が設置され（註4）、中央政府より国司が派遣され、天皇を中心とする中央集権的国家による直接的統治がはじまりました。また武蔵国の国府は府中に置かれ、国府の役所である国衙こくがの建設がはじまりました。この国衙およびその付属施設の建設に利用された木材は、おそらく多摩川あるいは秋川の上流から供給されたと考えられ、このときに五日市は国府と密接な関係をもつようになったのでしょうか。これを契機に、五日市の有力者は急速にその勢力を増大させ、国司の権力を背景に、小川郷を統治するほどまでに成長したと考えられます。その有力者によって、中央の神祇の祭祀にならって、氏神を祭って阿伎留神社が創建されたと考えられます。したがって阿伎留神社の創建は、武蔵国の国府設置から少し遅れた、遅くとも7世紀後半と想定されます。

7 阿伎留神社の盛期

また、天平13(741) 聖武天皇は仏教による国家鎮護、^{しゅうじょう}衆生救済を目的として、全国に国分寺建立の詔を出し、僧寺(金光明四天王護国^の之寺)と尼寺(法華滅罪^の之寺)の建立を命じましたが、武蔵国分寺の建設においても、五日市は木材の供給地として重要な役割を果たしたでしょう。武蔵国分寺の創建は、国分寺跡から出土した古瓦に武蔵の諸郡の文字が刻まれたものがありますが、その中で新羅郡^{しんら}の文字瓦がないことから、遅くとも新羅郡の設置された天平宝字2年(758)以前であると考えられます。この国分寺の建設を契機に、おそらく各地の有力な豪族たちによって神社建築ばかりでなく、寺院建築も建設されていったでしょう。そしてこれらの建築生産を背景に、阿伎留神社周辺に根拠地をもつ勢力は、ますます強大になっていったといえます。

このように木材の供給を通して国司との深い繋りをもっていたがゆえに、阿伎留神社は元慶8年(884)従4位下を授かり、さらに延長5年(927)に完成された『延喜式神名帳』に式内社として記載されたのでしょう。

8 二宮神社の転期

国司は国内の政治を司るばかりでなく神祭を重要な職務とし、それゆえ国内の有力な諸社を巡拝しなければなりません。その巡拝の労を省くために総社なるものを国府に設け、国内の有力な神祇を勧請合祀しました(註5)。武蔵国には総社として六所宮^{ろくしょのみや}(現在の^{おおくにたま}大国魂神社)がありますが、これは一宮小野大明神、二宮小河大明神、三宮火河大明神、四宮秩父大菩薩、五宮金鑽大明神、六宮稻山大明神(『神道集(1350年ころ)』より)を合祀したものです。府中に六所宮が設置された時期は、中央の記録に全くみえず、明確にできませんが、京都近辺の各社を選び、事ある時に奉幣する例となった16社、(のちに22社)の設定が天曆(950)ころのことと認められることから推測すれば、平安中期と考えられます(註6)。

ここで留意しなければならない点があいくつあげられます。第1に、なぜ一宮が『延喜式神名帳』における官幣大社である火河大明神(氷川神社)ではなく小野大明神(小野神社)であるのか。第2に、なぜ二宮が『延喜式神名帳』において多磨郡の筆頭にあげられている阿伎留神社ではなく、式外社の小河大明神(二宮神社)であるのか。

第1点については、武蔵国府が府中に置かれたことに

よって、南武蔵は開発が進み、経済的發展を促進させたのに対して、北武蔵を根拠地とする旧旣邪志国造の勢力は、平安中期にはかなり衰退していたと考えられ、その勢力が祭祀する氷川神社より、国府に近く、礼拝しやすかった小野神社を一宮として指定したのは当然のことであつたのでしょう。

第2点については、小川郷ははじめ材木の供給地として国府にとって重要な役割を果たしていましたが、平安中期になって、中央の統制が弱まり、国府の経済力が低下すると、大規模な建築生産が減少し、材木の供給地としての性格から、次第に貢進馬^{まき}の牧としての性格を強めていったと考えられます。延喜式左馬寮式^{さき}に定めてある武蔵の勅使牧は、石川、由比、小川、立野であり、小川牧は現在の東秋留辺りの地をいい、牧の重要性にともなう小川郷の中心が、阿伎留神社周辺から次第に二宮神社周辺に移行したことが想像されます。その時期は、おそらく六所宮の創立時期に近く、10世紀中ごろと考えられ、またこの時期に二宮神社は転期をむかえたといえます。そしてこの小川牧を掌握した別当が、小川郷の有力者に成長し、その有力者こそ武蔵七党の1つである西党に属する小川氏であつたのです。

(註)

1. 菱沼勇著『武蔵の古社』有峰書店、昭和47年
2. 五日市町史編さん委員会編『五日市町史』昭和51年
3. 註1に同じ。
4. 『日本書紀』に、この年百濟からの帰化人を武蔵国に置いたという記事がある。
5. 東京都神社庁西多摩支部編『西多摩神社誌』昭和58年
6. 府中市編さん委員会編『府中市史上巻』昭和43年

筆者紹介 白井裕康氏は古寺社建築を専門とされる新進の建築学者です。青梅市の天寧寺・安楽寺、五日市町の広徳寺の修復を手がけられ、当地方の寺社建築について豊富な経験と知識をもっておられます。

今回は阿伎留神社の成立とその盛期を武蔵国府ならびに武蔵国分寺建設の用材調達にからませて考察するといういかにも建築学者らしい見解を示されています。次回をご期待下さい。(I)